

ルによる農作物の被害が増加していることが明らかになった。今後、これらの開発事業とサルとの棲める生態系の確保、そして農作物への被害の防止等の問題を調整し、調和のとれた地域開発への構想を早急にたてる必要性が感じられた。

木曾川左岸流域に棲息する野性ニホンザルの猿害防止についての実験的研究

泉山茂之(京大・霊長研)

全国各地で猿害が問題化し、害獣としての駆除が著しく増加し、保存上重大な問題となっている。このため、人間とサルとの共存をはかるべく、サルが耕地を回避するよう学習させることが必要である。このため長野県上松町において、煙火システムによる猿害阻止実験を行なった。

耕地及び周辺の林内に煙火システムを設置し、電流による遠隔点火により爆発させるものとし、火薬量 6.5 g の煙火 5-10 発を連続爆発することができ、群内のあちこちで爆発するようにした。上松町全体で 38 系列、煙火 277 個を設置し、線延長は 8,429 m であった。また、この研究は 1981 年 8 月から実施されている。

サルは、K, T, S, M の 4 群で、1982 年 4 月まで 11, 16, 6, 2 回の強化を行なった。4 月以降は感応式を併用し、他の強化方法も含めると 12 月までに 15, 0, 13, 2 回の強化を行なったことになる。

T 群の東野の耕地への出現は、1980 年と 1981 年とでほとんど差が見られなかったが、クワ被害は前年と比較にならぬほど減少した。とくに前年度全滅状態にあった東北側の広いクワ畑は、ほとんど被害がなかった。しかし、強化を受けなかつた南側のクワ畑には、3 月に入ってサルが侵入して大きな被害を与えた。

また K 群は、2 日間に計 3 回の強化を受けた後、実に 52 日間全く洞の耕地に接近しなかった。猿害の最盛期でのこの空白は、明らかに耕地回避が行なわれたと判断できる。

以上のように、耕地回避が習得され、実験開始後、農業経営上問題となるほどの被害は生じておらず、1982 年度イネの被害は全くなかった。

今後の課題としては、さらにシステムに改良を加えること、両群の反応の違いをみてもわかるように、サルは複雑であり、いくつかの駆逐方法を

併用することが好ましいと考える。

木曾川左岸流域に生息するニホンザル自然群を対象としたサルへのインパクトの研究

田中進

木曾川左岸の上松町と大桑村に生息する野生ニホンザルは、近年、耕地に出現し、野荒しをするようになった(川村・田中・泉山, 1983)。以前はなかった猿害が生起するに至った要因は種々考えられるが、一般的には、奥山の大规模一斉造林によって、生息地の環境悪化が進み、人里に出現するようになったといわれている。本研究地である木曾研究林においては、おおむね次の点がサルに影響を与え、猿害を生ずるに至った要因として考えられる。

1. 農業従事者の構成変化と省力化によって、耕地へ出現したサルへの対抗力が著しく低下した。また、農山村の過疎化、人的構成の変化、山の利用価値の低下によって、人が山へ入る機会が減少した。

2. かつて薪炭林として利用していた里山は、その利用価値の低下とともに放置され、かわってサルにとって食物植物が豊富であるため、サルの重要な利用地域になった。また、里山の小規模伐採がサルの遊動に影響を与えた。

3. 狩猟の対象獣でなくなったサルは、有害鳥獣駆除による狩猟を除くと狩猟圧を受けなくなった。

木曾では、サルにとっての自然環境に大きな変化はみられず、人的環境の変化が猿害をひき起こした重要な要因と考えられる。

課題 2

志賀高原地域におけるサルの主要食物植物の季節変化

渡辺隆一(信州大・志賀研)

1982 年の 5 月より 11 月まで、志賀高原地域におけるサルの主要食物(ササ類、コシアブラ、サクラ類)の分布と植物季節について調査した。

ササ類の中でもサルの食料として重要なものはチシマザサである。本種は標高 1000 m 以上の地